

広島県立生涯学習センターと高等教育機関の連携による 社会教育関係職員研修の成果と課題

葛原生子（広島県立生涯学習センター）、〇志々田まなみ（広島経済大学）、
〇徳重宏美（広島県立生涯学習センター）、新田憲章（広島県立生涯学習センター）、
山川肖美（広島修道大学）

研究の目的

本発表は、広島県立生涯学習センター（以下、県センターと略記する。）が平成 22 年度に実施した「生涯学習振興・社会教育関係職員等研修（初級研修）」の成果を明らかにするとともに、この研修の特徴である、市町村の生涯学習担当部局、県センター、高等教育機関の三者による研修プログラムの課題等について明らかにすることを目的としている。

地方自治体における行政システム改革の波は、当然のことながら都道府県立の生涯学習センターにも及びはじめている。そこではあらためて、当該する都道府県立の生涯学習センターならではの機能や役割のあり方が厳しく問われることとなる。県センターでも、県内の市町村生涯学習・社会教育担当者と NPO 等に調査を行い、求められているセンターの役割と機能の確認作業を行った結果、重要な期待の一つに、各自治体の生涯学習振興・社会教育関係職員や指導者の養成・研修があることが再確認された。そこから、従来の指導者養成や職員研修について見直しを行うとともに、新たなニーズに対応しうる養成・研修のあり方を模索している。

これら養成・研修を考える上で重視しているのが、市町村の生涯学習担当部局、県センター、高等教育機関の三者が協力したプログラムづくりである。こうした背景には、市町村の大規模合併をはじめ、生涯学習担当部局の首長部局への移管、まちづくり行政との連携など、これまで以上に市町村における生涯学習振興の方策等が多様化、複雑化している現状があげられる。こうした混乱の解消に向け、県センターは市町村に向けて理論的な基盤やモデルを開発・提供することで、市町村とともに新たな実践を切り拓いていかねばならない。こうした県センターの研究機能やプログラム開発の機能の向上を支援する役割を、高等教育機関が担っており、養成・研修プログラムについても、全体の計画段階から教材の開発、評価活動に至るまで深く関わっている。

こうした取り組みの一つが、本発表で取り上げる「生涯学習振興・社会教育関係職員等研修（初級研修）」である。平成 21 年度にモデル事業として 2 地域で試験的に実施し、平成 22 年度からは県全域を対象に実施している。こうした取り組みの成果や課題は、広島県にとどまらず、我が国の生涯学習推進の中心的役割を担う全国の都道府県立の生涯学習センターが実施する指導者養成や職員研修の方策を検討する上で重要な示唆に富むものとする。

1. 広島県立生涯学習センターの「生涯学習振興・社会教育関係職員等研修」の概要

(1) 趣旨 県内市町の生涯学習振興・社会教育関係職員等に対し、職務経験に対応した研修を実施し専門性の向上を図る。

(2) 概要

	初級研修	上級研修
対象	市町の生涯学習振興・社会教育関係職員等	
	職務経験 3 年未満の者（各会場 30 名）	職務経験 3 年以上の者（10 名）
回数等	2 会場× 4 回	1 会場× 4 回

ねらい	生涯学習振興・社会教育行政に初めて携わる職員に、職務上必要な基礎的知識・技能を提供する。	住民ニーズや市町の課題に対応した社会教育に関する各種計画や事業の立案能力や、生涯学習関係者等の連携のコーディネート力など、地域において生涯学習振興・社会教育行政の施策を推進する資質・能力を持つ人材を育成する。
プログラム	<ul style="list-style-type: none"> ・生涯学習・社会教育関係法令・答申・動向の理解（講義） ・学習プログラム開発の実際（演習） 	<ul style="list-style-type: none"> ・生涯学習・社会教育の動向、関係職員の役割の理解（講義） ・学習課題やニーズの把握・分析、企画立案、評価等（演習）
運営上の工夫	演習（グループワーク）の際に、市町村のベテラン職員等を支援者としてグループごとに配置	

2. 平成 22 年受講者（初級研修）の学習成果分析

(1) 受講者によるアンケート調査の結果

①研修内容の理解度、学習成果

- ・いずれのプログラムにおいても「大いにできた」「できた」という肯定的評価が 8 割以上であった。
- ・研修全体の難易度を「難しかった」と応えた受講生の具体的理由として、学習プログラム開発の考え方と手法を習得するグループ活動が難しかったという意見が多かった。さらに、経験年数によってその難易度の感じ方に違いがみられた。

②研修による業務に対する意識や行動の変化

- ・「変化があった」と回答した者が 24/30 名（80.0%）。
- ・経験年数によって変化の内容が異なる傾向がみられる。経験年数 1 年未満の受講者は、自信や積極性が増すなど、業務への意欲に関わる内容が多かった。一方、職務経験 3 年以上の受講者からは、学習プログラム開発の手法についての見直しや、新たな気づきがあったなどの意見が多く見られた。

(2) 学習プログラム開発のグループワークにおける支援者の役割

①支援者の役割について受講生からの意見

- ・支援者がグループ活動の支援をしたことに、肯定的な評価をした受講生は 29/30 名（96.7%）。
- ・支援者の具体的な役割としては、議論が煮詰まったり、方向を見失いそうになった際に見通しを持たせて導く役割（プロデューサー）や、経験や専門性を活かした助言を行う役割（アドバイザー）があげられる。

②支援者自身の意見

- ・学習プログラム開発の過程の中で、何に時間をかけて深く検討したらよいかについて整理しておく必要がある。
- ・支援することで、自分の学び直しや業務の振り返りができた。

(3) 高等等教育機関との連携による成果と課題

- ・計画段階から関わることにより、研修の意図や研修全体の流れをふまえた指導ができる。
- ・高度で複雑な実践的課題に直面する場面もあり、高等教育関係者や県センター職員、支援者によるチームでの研修支援体制を整える必要がある。

まとめ

(1) 上級研修と初級研修の関連づけ

(2) 市町村・県センター・高等教育機関の連携型と研修モデルの提案